

遷延性意識障害者家族の精神的負担を軽減するために有効な相談支援のあり方の検討

○田中 陽子、兼松 由香里、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

目的

自動車事故による頭部外傷により遷延性意識障害が後遺した患者を支える家族の精神的負担は少ない。本研究では家族の精神的負担への対処方法を調査することにより、家族の精神的負担を軽減するために有効な支援・相談業務のあり方を検討することを目的とした。

方法

H13.12 から H25.12 までに当センターを退院した患者(200名)のうち、連絡先が把握できた患者の家族(175名)を対象としてアンケートを行った。内容は回答者の性別・年齢・患者との関係・相談相手の有無・相談相手の種別・患者の状態・療養拠点・社会資源の利用状況・COPE28で構成された。回収率67.4%(118名)、内有効回答率49.7%(87名)であった。

結果

相談相手がいる家族といない家族を比較すると、相談相手がいる家族の方が”情緒的サポート”を受けている実感が有意に高く($t=1.84, p<.05$)、”自責の念”については有意に低かった($t=2.50, p<.01$)。また、相談相手に専門職を含んでいる家族と含んでいない家族を比較すると、専門職を含んでいる家族の方が”第三者からの助言”を受けている実感($t=2.81, p<.01$)、現状の”受容”($t=2.23, p<.05$)、”宗教”的サポートの恩恵($t=2.10, p<.05$)、問題を”積極的再構築”する意欲($t=2.00, p<.05$)、”情緒的サポート”を受けている実感($t=1.86, p<.05$)がいずれも有意に高かった。

考察 結語

家族は相談相手がいれば、しかも相談相手が専門職である方が現状を受け入れ、前向きに考えやすいことが示された。専門職への相談は家族の精神的負担を軽減するために有効であり、退院支援において、地元の専門職と連携をとり家族を繋ぐ支援をしていく必要性があると考えられた。